



第2章 まちづくり支援と自治体史の編纂

木村, 修二 ; 吉川, 圭太 ; 佐々木, 和子 ; 村井, 良介 ; 坂江, 渉 ; 添田, 仁 ; 井上, 舞 ; 三角, 奈緒 ; 前田, 結城 ; 水本, 有香 ; 市澤, 哲 ; 板垣…

(Citation)

歴史文化に基礎をおいた地域社会形成のための自治体等との連携事業, 11(平成24年度事業報告書):25-40

(Issue Date)

2013-03-31

(Resource Type)

report part

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/81005270>



第2章 まちづくり支援と自治体史の編集

大学協定にもとづく灘区との連携事業

神戸大学・灘区まちづくりチャレンジ事業助成制度は、地域の福祉の向上、産業振興、教育・文化・スポーツの振興、人材育成、まちづくりなどの諸分野において相互に協力し、地域社会の発展や活性化に寄与するため、2004年12月に神戸市灘区と神戸大学の間で締結された連携協力に関する協定に基づき、地域の課題の解決および魅力の向上を目的として実施する活動・事業に助成を行い、灘区政の活性化に資することを目的として設けられた助成制度である。昨年度「『摩耶道のとおり村の歴史』」係資料調査および講演会開催事業が採択され、活動を実施した（詳細は『「摩耶道のとおり村の歴史」関係資料調査および講演会開催事業 成果報告書』〈神戸大学大学院人文学研究科地域連携センター、2012年3月〉を参照）が、本年度も昨年度に引き続き応募し採択されるに至ったものである。

(1) 2012年度神戸大学・灘区まちづくり事業

本年度の企画テーマは「「摩耶道のとおり村の歴史」資料調査・講演会開催・冊子編集事業」とした。

昨年度事業の成果として、2012年3月12日摩耶山天上寺において、「摩耶道のとおり村の歴史」講演とフィールドワーク（第1回）を開催した。講演会の内容は主に天上寺に関する演目でまとめたが、そこでは当初の予定（30名）を超える参加者を得た（40名参加）。このことは、一般の方々が摩耶山に関する歴史文化に深い関心を持っていることを如実に表しているものと考えている。

昭和51年（1976）に天上寺の旧伽藍が惜しくも灰燼に帰したが、10年を経た昭和61年には、天上寺草創の地と伝えられる「元摩耶」の地に金堂が再建され、その後も堂舎の再建が進み、天上寺は旧観を取り戻しつつある。しかし、かつては麓より仰ぎ見ることができた天上寺の伽藍も、移転再建後は場所的に仰ぎみることも叶わなくなり、このことによって地元住民と摩耶山との間に空間的なへだたりが生じたことは否めない。しか

し、われわれの主催した先述の講演会をはじめ、文責者も講演者として参加させていただいた2012年2月18日に開催された「摩耶山天上寺の歴史を語る会」（主催：灘コミュニティアーキテクト）でも予想を超える50名以上の方が参加されるなど、摩耶山をめぐる歴史文化への関心は高く、必ずしも心的な隔絶が決定的に生じているわけではなかったことがわかった。この点を、一般市民のニーズととらえることも決しておおげさなことではないだろうと考えている。

そこで本事業では、アンケートによる要望も多かった第2回目となる歴史講演会の開催や近い将来発行を目指す小冊子の編集を通して、本年度までに得た調査・研究成果を一般の方々へわかりやすく提示し、さらにより多くの方々に摩耶山および周辺地域の歴史文化の豊かさを理解してもらうことを活動の目的とした。

事業の中心となったのは、昨年度着手した五毛村大利家文書の整理作業である。この作業は、整理補助員として本学大学院生の山本康司君を雇用し、2012年7月より12月までのべ25日間かけて実施した。この作業によって、整理できた文書数は、1293点。昨年度に完了した分（文書番号1～484）も含めて1777点の文書の整理が完了したことになる。ただ、かなり大部な文書群なので、これでも未整理分をかなり残さざるをえなかった。

このほか、摩耶道の信仰圏を探るべく丹波・播磨方面への摩耶山廻檀先調査を実施（2012年10月9～10日）し、さらに摩耶山天上寺所蔵の摩耶山関係絵葉書の追加調査などを行う（2012年11月23日）など、現地調査も実施した。

2012年12月21日には、本事業の主要目標の一つだった講演会を実施した。会場は、岩屋青年会館2階会議室である。開催にあたっては、灘区役所まちづくり課の後援に加えて、一般財団法人岩屋青年会からもご後援を賜った。さらに天上寺と岩屋地区内に鎮座する敏馬神社のご協力もいただいている。当日は、13時より大学を代表して坂江渉の挨拶のあと、木村が「江戸時代の摩耶山と山麓の村々」と題して約1時間の講演をおこなった。その後、主に坂江が案内者となってフィールドワークを実施した。コースは、岩屋の敏馬神社を出発して、旧摩耶道を山の方へ向かって北上し、最終的に摩耶ケーブル下までたどった。講

演会の参加者は、約 100 名、フィールドワークは 50 名もの参加を得た。当日実施したアンケートでは、講演での時間の短さや会場の不自由さを指摘した意見が多くいただいたが、概ね好評価を得たものと考えている。



2 年目を終えた本事業は、いまだ整理の続く大名家文書の整理作業を残しているものの講演の形や、以下に掲げるような成果報告の形で、すこしづつではあるが成果をあげつつある。今後はこれらの成果をもとに最終的な目標である小冊子づくりを目指してゆきたい。

(2) 本年度以前の活動関連

2005 年度に制作した『篠原の昔と今』、および 2006 年度制作の『水道筋周辺地域のむかし』の両冊子は、本年度も少なくともはなったが断続的に配布依頼があった。2013 年 2 月 28 日現在での残部は『篠原の昔と今』は約 350 部、『水道筋周辺地域のむかし』は約 50 部となっている。

(文責・木村修二)

神戸市文書館との連携事業

2006 年度より始まった神戸市文書館との地域

史料の収集整理・公開・活用に関する共同研究事業を、今年度も継続して行った。文書館の開館日である月曜日から金曜日、午前 9 時から午後 5 時まで、森田竜雄・河島裕子・三角菜緒の 3 名が事業を担当した。

事業内容としては、以下の通りである。

- ①館蔵資料（古文書・複製資料）の台帳整備。文書郡ごとに来歴、点数、所蔵形態（原文書、マイクロ、ネガ、コピー等）、目録の整備状況、配架場所などの情報を整理した。
- ②館蔵古文書の再整理として、田中家文書・芝家文書の再整理を行った。また、『新修神戸市史』編纂で借用していたいくつかの史料群の取扱い確定（寄贈・返却）につき、助言を行った。
- ③市民のレファレンス対応への協力。
- ④館蔵史料群を利用した企画展の実施。2012 年 10 月 1 日（月）～ 19 日（金）、「戦時下にあった阪神大水害」の展示および配付資料の作成を行った。期間中の来館者は 942 名であった。これは昨年度の企画展「近代神戸の風景—レファート写真コレクション」に次ぐ来館者数であった。今年度の企画展では、1938 年に発生した阪神大水害を、戦時期という時代状況に着目して読み解いたものであり、神戸市文書館所蔵の行政文書や写真、新聞を用いて構成し、スライド上映も行った。多くの来館者を得たことは、災害に対する市民の関心が高まっていることの反映であったと思われる。

また、昨年度から、長らく閉館となっていた平日の午前中について、常時開館ではないが対応可能となった。来年度も上記事業の継続を図りながら協力関係を維持し、館の存在意義がより周知されることをめざす。 (文責・吉川圭太)

神戸市企画調整局との連携事業

今年度、神戸市企画調整局とは、2012 年 11 月 15 日に神戸大学人文学研究科で、神戸市企画調整局企画課 3 名の方々と神戸大学から 5 名が参加し、神戸市の震災関連行政文書について、意見交換のための研究会を実施した。また 2013 年 1 月 28 日には、コムスタこうべ（神戸市生涯学習支援センター）で開催されていた阪神・淡路大震災関連文書企画展を見学した。ただしこちらの希望した神戸都市問題研究所分室（震災関連行政文書

の整理のための施設)の見学は、企画課多忙のため実現しなかった。(文責・佐々木和子)

神戸を中心とする文献史料所在確認調査

本年度該事業の主な活動は以下の通りである。

(1)中央区北野地区・西脇家文書への対応

2010年5月に寄贈を受けた西脇家文書を主な素材とする「西脇家文書研究会」は、今年度もおよそ月1回のペースで継続してきたが、同会は2013年3月の例会を持って終了する予定である。

(2)神戸北野美術館における展示協力

昨年度よりはじまった神戸北野美術館での展示は現在も継続している。

(3)東灘区本山地区(旧小路村)辻家所蔵文書への対応

2013年に入り急遽実施したのが、旧小路村の庄屋家である辻淳喜家文書の調査である。同文書は、『本山村誌』(1955年)に「辻雅三氏所蔵文書」とあるものと同一と思われるが、『本山村誌』上で翻刻されている文書が、現存しているかどうかは、今年度の調査では確認できず、今後の調査に委ねられる。

本調査のきっかけとなったのは、同家より地域連携推進室を通じて本学へ連絡があったことによる。同家では近く(3月以降の予定)、少なくとも大正期以前建築と目される現在の住宅を建て替えられる計画を持っておられ、それにあたって所蔵の文書などをしかるべき機関に寄贈することを思い立たれたという。そこで想起されたのは、阪神淡路大震災直後に史料ネットが阪神地域で資料のレスキュー活動を開始したことを紹介した新聞記事の切り抜きにあった神戸大学の奥村弘(当時助教授)の名前だったという。昨年10月頃より考えていたが、結局引越直前となる2013年2月になって大学まで連絡されてきたものである。これをうけて、2月8日に文責者が同家を訪問し、倉庫内にある文書の詰まった木箱やその他分散して保管されている文書を確認した。辻氏と話し合う中で、今から20年前に、神戸深江生活文化史料館の大国正美氏(当時館長補佐、現在館長)が同家を訪問され、文書の一部を整理されていることが判明したので、本調査後に同氏へ連絡を取り、後日(2月24日)大国氏とともに同家を再

訪した。

文書群としては、尼崎藩領だった江戸時代のものを中心とする村方史料に加え、明治以降の地車関係や本山村関係の史料が多く含まれていた。また、敷地内に、天正元年の銘がある鉄製の燈籠があり、また明治初年の太政官発行の高札も1枚あった。

今後は、ひとまずは同家で保管していただき、同家の建て替えや転居などが落ち着かれたところを見計らって、再度訪問し、深江か神大の方へ全ての文書を預かり、整理などを経たあとに、落ち着き先を決めるということで3者が合意し、調査は終了した。(文責・木村修二)

(4)有馬温泉奥の坊史料調査

有馬温泉奥の坊より、旧社員寮の解体にともない史料が出てきたので、調査してほしいとの依頼を受け、今年度は2回の調査をおこなった。近世の文書と和本が約90点あったほか、軸装された絵画、古写真等があった。今年度は概要調査と、近世文書と和本の写真撮影をおこなった。

(文責・村井良介)

財団法人住吉学園との連携事業

財団法人住吉学園との連携事業は、学園が管理している住吉歴史資料館(本住吉神社境内に所在)の運営を中心として進められている。その運営は、学園より要請された地元有志が中心となっており、当センターからは、奥村・木村が専門委員会としてそのサポートを専門的な立場から行っている(専門委員会には、松下正和氏<近大姫路大>も継続して入っていただいている)。

以下、今年度の活動の概要を記す。

(1)『住吉歴史資料館だより』の発行

『住吉歴史資料館だより』は、11月15日に第5号が発行されたにとどまった。

第5号では、文責者執筆の「《『住吉村誌』を読む》住吉村と摩耶山」、事務局の内田雅夫氏による「住吉の風景—だんじりが似合うまち」および前田康三「住吉側・水車小屋跡の見学会」が掲載された。

(2)「阪神淡路大震災と住吉」の開催

2012年10月28日(日)、住吉歴史資料館内の座敷において、住吉地区の各小中学校生徒を対象

とした合同お茶会が開催されたが、これに併せて同館2階で、「阪神淡路大震災と住吉」と題した展示会を開催した。

本展示会では、平成7年阪神淡路大震災当時の被災写真などを展示した。

(3) 住吉歴史資料館展示関係

本住吉神社に併設されている住吉歴史資料館の常設展示について、今年度より断続的にリニューアルしている。作業は主に展示ケース内のコンテンツ整備が主だが、定期的な展示替えなども念頭においたものとなるように作業を進めている。

(4) 阪神淡路大震災関係聞き取り調査

本年度より月1回程度をめぐり、阪神淡路大震災関係の聞き取り調査を開始した。大学側は奥村が主担となり、地域連携推進室の佐々木和子氏や水本有香氏にも協力いただいで進めつつある。

(文責・木村修二)

神戸元町商店街連合会との連携事業

神戸元町商店街連合会（みなと元町タウン協議会）との連携関係は、2009年12月の「西国街道モニュメント」の設置事業以来つづいている。

2010年度は、同連合会の奈良山貴士氏が幹事をつとめる社団法人・神戸経済同友会（平成22年度地域開発委員会）の「『神戸海港都市づくり研究会』（仮称）の設置による戦略的かつ継続的な都市づくりへの提言」（平成23年2月）の作成に向けての文案作成に協力した。また2011年6月13日、同経済同友会の地域開発委員会主催の講演会で、奥村弘副センター長が、「海港都市の力 ～兵庫・神戸の歴史性を考える～」と題する講演会をおこなった。今年度はとくにめだった動きはなかった。

(文責・坂江渉)

神戸市淡河における連携事業

これまで、石峯寺の史料調査や、神戸市教育委員会・淡河町自治協議会と連携した歴史セミナーの開催などをおこなってきたが、今年度は特に動きがなかった。今後、また関係者と対応を検討したい。

(文責・村井良介)

木村家文書の整理

神戸市東灘区御影の酒造家木村家の古文書史料群について、2008年以来、仮設置場所の伊丹酒造組合や大学などで整理作業をおこなってきた。今年度は、大学購入分で目録の完成した史料群（2函）に関連して、元地域連携研究員の石川道子氏にお願いして、原文書に付箋をはり、ナンバリング作業をすすめた。残り分を来年度におこなう必要がある。

(文責・坂江渉)

大学協定にもとづく小野市との連携事業

神戸大学と小野市との間では、2005年1月26日に社会文化にかかわる連携協定（包括協定）が結ばれ、それ以来、共同事業がすすんでいる。今年度の事業内容は、以下の通りである。

(1) 小野市立好古館 一平成24年度特別展（地域展）「下東条の古代中世と住吉神社信仰」の開催協力と博物館実習の実施

好古館の地域展については、平成22年度まで、小野市内の各地区の子供たちによる「調べ学習」を基軸にしたものであった。しかし23年度からやり方が変えられた。下東条地区地域づくり協議会では、地域の活性化をはかるため「下東条地区まちづくり活性化計画」を提言（4年間事業）。この中には豊かな自然と歴史をいかしたまちづくりの提言も多く盛り込まれている。そこで地域づくり協議会、各自治会、学校が共同して、地域の歴史調査をおこない、将来的にその成果を「下東条文化財ウォーキングプラン」としてまとめることを決定。本年度の地域展づくりは、昨年度までと同様、こうした作業の一環に組み込まれ、その準備作業の成果の一端を公表する場に位置づけられた。

夏休み以降、今年度の展示会および「ウォーキングプラン」用のマップ作り等をめざして、基礎的な準備作業として、各地区（おおむね下東条地区に含まれる大字）ごとの歴史文化の聞き取り調査が実施された。

センターではこの聞き取り作業に協力（担当教員の坂江が参加）するとともに、歴史系の博物館実習生の2名が、「博物館実習の事前実習」の1

つとしてこれに参加し、地域の方々の地域認識や地域文化の実像に接することができた。



なお特別展の入場者数は、好古館での展示会が1412名（10/27～12/9）、コミセンでの展示会が352名（1/7～1/20）で、総数1764名だった（昨年の「下東条歴史街道をゆく」展の好古館展示は1236名）。

(2) 講演会開催の協力

上の特別展の関連企画として開かれた講演会企画に協力して、坂江がコミュニティセンター下東条視聴覚室で「古代の下東条地区と住吉大社」と題する講演をおこなった。（文責・坂江渉）

連携協定にもとづく朝来市との連携事業

(1) 生野古文書教室

平成18年度に立ちあげられた生野古文書教室（もと古文書初級教室）が、センターと協力して、「御仕置五人組帳（上生野村）」（生野書院所蔵）の翻刻・現代語訳を行い、『解説 上生野村 御仕置五人組帳』として刊行した。

これは、古文書の内容を平易な文章に直すことで、子供でもわかるような冊子にまとめて出版することを目的とした事業である。地元の古文書を読むだけでなく、その成果を市民が市民に還元するという意義を持つ。

(2) あさごの歴史と古文書講座

昨年度に引き続き、朝来市全域を対象として「あさごの歴史と古文書講座」を4回開講した。また、同時に古文書に関する相談会も行い、身の回りの古文書についての情報を寄せて貰った。なお、第2回に関しては、中世山城のフィールドワークを実施したため、古文書講座・古文書相談会は開催しなかつ

た。講座の実施状況については以下の通りである。

- ・第1回 平成24年8月4日
 - ①「但馬牛の歴史—牛から読み解く時代と社会—」（板垣貴志）
 - ②「古文書の基礎」（三角菜緒）
- ・第2回 平成24年10月20日
 - ①「山東の城」フィールドワーク（西尾孝昌）
- ・第3回 平成24年12月15日
 - ①「播磨国風土記からみた朝来と播磨」（松下正和）
 - ②「朝来市の古文書を読んでみよう」（三角菜緒）
- ・第4回 平成25年2月9日
 - ①「風聞に見る但馬の幕末史—遺された災害の記憶—」（添田仁）
 - ②「幕末の生野の古文書を読んでみよう」（前田結城）

講座自体は概ね好評であるが、内容・参加者の固定化が問題となっている。来年度は、講座内容の充実・刷新を行うべく一端講座を中止し、準備期間にあてる予定である。

(3) 民間所在史料の調査・保全

○枚田家文書

朝来市教育委員会からの依頼で、昨年度に引き続き整理作業を行っている。今年度は、昨年度の史料概要調査を踏まえた上で、神戸大学において詳細な目録作成に取り組んだ。史料の概算2000点の内、2月9日現在で1281点の目録作成を終了した。次年度も引き続き整理を進める予定である。

○太田家文書

郷土史家・太田虎一の旧蔵史料である。昨年度、史料の表紙撮影を行い、目録を作成した。今年度は、そのうち今後の活用に利するものを選び、全頁の撮影を行った。

○山田修平家文書

生野銀山町の町役人（近世末期～近代）を務めた家で、7月30日、朝来市教育委員会・生野書院・福崎町立神崎郡歴史民俗資料館・神戸大学人文学研究科地域連携センターが共同で調査・保全した。現在、朝来市の施設で仮保管している。

○寺田政男家文書

生野銀山町の地役人（近代）を務めた家で、11月17日、朝来市教育委員会・生野書院・神戸大学人文学研究科地域連携センターが共同で調査・保全した。このうち、畳上敷き下張り文書と塩袋文書が朝来市

に寄贈され、現在、朝来市の施設で仮保管している。

(4) 石川家文書の整理

昨年度に引き続いて、石川家が所蔵する古文書の整理を生野書院で行った。

所蔵者が移管してきた古文書は、すべて中性紙の古文書箱に詰め、随時、整理と写真撮影を行った。撮影作業は、現地在住の山崎實氏・加門洋子氏が担当し、井上舞がその撮影作業の統括、データ整理を行った。撮影期間は、以下の通りである。また撮影作業をスムーズに進めるため、今年度も、9月25日・26日に7名で整理作業を行い、未整理文書のクリーニングおよび付箋付けを行った。

撮影作業は概ね順調で、現段階で約5000点(写真枚数27000点)の撮影を終了した。撮影済みのデータについては、現在添田研究室に保管し、増澤駿(神戸大学院生)が目録を作成中である。

石川家文書については、まだ多くの未整理文書が残っており、次年度も引き続き、撮影作業を継続していく予定である。

<撮影期間> (1～5は昨年度)

6ターム

平成24年4月5日～4月27日

7ターム

平成24年5月10日～6月1日

8ターム

平成24年8月23日～9月14日

9ターム

平成24年9月25日～10月23日

10ターム

平成24年11月8日～12月6日

11ターム

平成25年1月8日～1月31日

12ターム

平成25年2月19日～3月12日

《各ターム内で山崎・加門は10日間勤務。井上は基本的に4日間勤務》

(文責・添田仁、井上舞、三角菜緒)

丹波市における連携事業

(1) 協定にもとづく連携事業

2007年8月に締結された協定にもとづき、本年度は以下の事業をおこなった。

①歴史講座・古文書相談の実施

■「講座 丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」

昨年度に引き続き、「講座 丹波の歴史文化を探る—古文書との出会い—」(以下、連続講座)を以下のスケジュールで開催した。

6月16日 前田結城「近世～近代初期における村の〈生存〉」(@春日住民センター) / 入場者数: 45人、古文書相談件数: 3件

7月28日 坂江渉「氷上郡の式内社と古代の神話」(@氷上住民センター) / 入場者数: 28人、古文書相談件数: 0件

9月22日 松下正和「丹波の教育史～青垣のこどもたちは何を学んだか」(@青垣住民センター) / 入場者数: 27人、古文書相談件数: 0件

10月20日 木村修二「村法・明細帳について—上小倉の古文書を素材に—」(@柏原住民センター) / 入場者数: 28人、古文書相談件数: 4件

11月17日 河野未央「鶴巻藩の丹波支配—地域社会との関係から—」(@山南住民センター) / 参加者数: 24人、古文書相談件数: 1件

12月15日 井上舞「丹波の寺社縁起について—神池寺を中心に—」(@ライフプアいちじま) / 参加者数: 43人、古文書相談件数: 4件

本講座の参加者からは、毎回アンケートにおいて連携事業の継続を望む意見が寄せられている。また連続での聴講の事例も多数認められる。ただし、本年度は県民局主催の講座との日程の重複等があり、入場者数・古文書相談件数ともに伸び悩む回もあった。調査・研究成果の発表の場として今後も講座は継続していく必要があると考えるが、古文書等文化財の「活用」と関わる分野については古文書相談に加えて、別途独立したイベントを企画・実施することが来年度の課題である。

②丹波市内古文書調査

■自治会文書

柏原町: 上小倉区有文書(2012/10/21)

春日町: 棚原区有文書(2011/6/25、8/13、9/30、10/29、11/28、12/27、2012/1/25、2/25) 歌道谷区有文書(2012/7/18、8/4~5、2013/2/26~27)、坂区

有文書（2012/8/4~5）

■旧家文書

春日町：荻野努氏宅文書（2012/2/26）

■旧寺社文書

氷上町：内尾神社文書（2012/11/9）

本年度は、調査した古文書を「活用」のステージに引き上げるための準備期間と見込んで、主に自治会文書のラベル貼り、撮影、加えて史料翻刻（後述）のために時間と予算を重点的につぎ込んだ。全調査件数が前年度よりも下回ったのは、そうした理由が大きい。ただ、本年度の調査によってあらたに得られた成果は小さくない。特記すべき成果として以下の諸点がある。

(a) 春日町歌道谷区有文書の全点目録、文書群概要を同地区自治会に贈呈することができた。また、目録にもとづいて美術・工芸品以外の全点ラベル貼り作業も終えることができた。同自治会長からは史料出納時のリスクが大幅に軽減されてよかったとの声をいただくことができた。現在は、全点撮影作業を進行中である。

(b) 春日町坂区有文書の全点目録作成を終えることができた。目録は近日製本して同地区自治会に贈呈する予定である。

(c) 春日町棚原区有文書については、上田確郎氏宅より氷上郡会、国領村会に関する史料があらたに「発見」され、区有文書に編入されることになった。大正期における氷上郡と「行政村」と「近世村」との関係を構造的にとらえることが可能となりうる文書群であり、「丹波市史」の基本史料となりうる。今後翻刻作業を進めていきたい。

(d) 荻野努氏宅文書（春日町朝日）が市に寄贈されることにともなう調査をおこなった。同文書はすでに兵庫県史中世編に収録済みであるが、赤井時家・内藤国貞関連の書状を含む戦国期の史料が現存されていることが確認された。この文書については厳密な分析を加え、来年度講座などでその成果の公表に努めたい。

来年度は春日町朝日・石才区有文書、丹波全市レベルの寺社縁起、および兵庫県立歴史博物館に所蔵されているという青垣町東芦田村関連文書の調査をおこなう予定である。

③研究成果物の発表

1) 「ここまで分かった棚原の古文書 パートⅢ」（2012年6月）

春日町棚原・山根の瑞巖庵観音堂に関連する区有文書の読解と、1706年（宝永3）に同寺を中興開山した実堂に関する調査の結果をまとめたパンフレット、全4頁。棚原地区全戸に配布された。

2) 広報たんばへのコラム寄稿

昨年度に引き続き、市広報誌『広報たんば』に毎月古文書調査・研究結果を市民向けのコラムとして発表した。

3) 目録・史料翻刻

■目録

坂区有文書目録／歌道谷区有文書目録

■史料翻刻

柏原歴史民俗資料館所蔵「柏原藩政日記」天保14年分／同所蔵上山家文書「大坂御船手御役御用状扣并ニ諸役所要状扣」／春日町坂区有文書「部落有林野統一ニ関スル一件書類」

（文責・前田結城）

(2) 丹波古文書倶楽部

これまで刊行されてきた本報告書内で言及できていなかった丹波古文書倶楽部についてまとめておく。

①設立までの経緯

丹波古文書倶楽部は、2009年に丹波市教委との活動協議の中でアイデアが生まれ、生涯学習セクションとの話し合いによって、具体化したものである。我々が丹波市内の文献史料調査を行えば行うほど、多くの文書群についての知見も蓄積される。こうした知見をいかに成果に結実させるかが、協議の主眼だったが、旧6町での連続講座とともに、史料そのものを市民とともに解読する場がもてないかというのが、丹波古文書倶楽部設立の発想の基点であった。運営方法はさまざま考えられたが、たまたま公民館活動を担当している市職員も協議に参加していたことで、丹波シニアカレッジの枠組みの中における参加者のクラブ活動の一つとして、結局実現することになる。

こうして企画が具体化され、第1回目が開催されたのは、2010年5月8日のことだった。結局チューターを勤めることになる木村の都合でどうしても例会は月1回でしか開催できないことになったが、1回あたり2時間充てるという形をとることにした。初年度は、5月から翌年2月までの

10回シリーズとした。

シニアカレッジの枠内でのクラブ活動であったため、参加者は10人前後とやや少なめだったのはやむをえなかったが、参加者の熱心さは人数の少なさとは全く無関係であった。第1回目こそ、ガイダンス的な内容に終始せざるをえなかったが、第2回目から早速、輪読を始めていった。なおこの輪読方式は、参加人数があまり多いと当たる回数が増えるため、参加者の緊張感という点で限界があるが、このクラブについては、人数が少ないことから頻りに担当が廻ってくることになり、参加者はかなり大変だったと聞いている。なお、テキストのセレクトは木村がおこなった。

② 倶楽部の自主運営化

さて、2010年度における倶楽部の活動は、市の主催事業であったが、この体制は年度限りであることが決定していた。そこで年度の終盤に、倶楽部の参加者に対し、今後倶楽部をどうしていくべきかについて協議したところ、ほとんどの参加者がせっかく始めた古文書の学習を今後も続けたいという意見を表明されるに至った。こうして、2011年度以降も古文書倶楽部の活動は継続する方向に決したが、問題は運営体制だった。もし継続するなら自主運営化は避けられず、一定額の会費を参加者から徴収して、会場費やチューターである木村への謝金・交通費に充てねばならない事などが議題にあがった。当所問題だったのは、参加者が終盤には10名を切るような状況のなかで、上記のような経費を捻出するとすると、相当の額を負担せねばならないのではという懸念を表面される方も居られたが、これは当然の意見といえた。さらに、運営は参加者自ら行わねばならないこともいうまでもないことで、参加者の中には率直に、自分ではできないことを表明される方もいた。

しかし自主運営化には相応のメリットも想定できた。すなわち、これまでがシニアカレッジの枠組みでのクラブ活動という限定された条件だったのに対し、こうしたリミットが外れることで、広く市民に参加を呼びかけることができるようになること、参加者が増えれば当然一人あたりの負担は軽減されるということである。もとより、当時の時点では、本当に参加者が増えるのかという不安もあったが、結局のところ、なんとか継続したいという意志の方が勝った恰好で、とにかく継続

の方向で前向きに考えていこうということで参加者が合意をした。結論的には、多方面での参加者募集の結果、当初50名もの参加表明があり、現在はほぼ30名程度の方がレギュラーで参加されている。

なおまことにありがたいことに、自主運営化後も、会活動の一部に公共性を持たせるようにすることを条件に、公民館（2011年度より「住民センター」）内の一室を無償で使用できるように、市側が取りはからっていただけることになった。

会の世話人には、2010年度参加者の中から4名の方が担当していただけることになった。また、会の名称は、クラブ活動という位置づけはなくなるものの、引き続き「丹波古文書倶楽部」を使用することに決定した。

③ 倶楽部新体制のスタート

本年度の倶楽部は、2011年5月14日に第1回目が開催された。以降2013年2月9日まで22回の例会が開催されている（2013年度も継続決定）。なお、例会は原則的に第2土曜日の開催、時間は10時より12時までとした。2時間の長丁場なので途中5分間の休憩を入れる。会場は、柏原住民センター2階の会議室を主とし、会場の都合によっては春日住民センターを利用するばあいもあった。

継続決定前に懸念された新会員問題は、全くの杞憂だった。世話人を始めとする各会員のご努力
テキスト選びは、2010年度は全10回ということもあって、できるだけ短い内容のものを選ぶように努めたが、2011年度以降の新体制の倶楽部では、一定程度長期的な継続が見込めることもあり、史料の長短はあまり念頭におかず、ある程度のテーマ性を持たせたテキスト選びができるようになった。

なお新体制での活動は、世話人方々の献身的なご努力もあって、現在まで極めて順調に進行している。

④ 倶楽部の今後～課題

古文書倶楽部の今後を考えるうえで、いずれ懸案となってくると思われるのは、新規会員の問題である。一度できた組織のばあい、新たな参加者は、一時的には加わっても、雰囲気の違いに耐えられず結局辞めて行かれるケースが多い。まして、古文書学習会という性格上、一定程度経験を積まれた方と全く古文書を読んだことがない方の

間のギャップは極めて大きいものがあるのはいうまでもない。経験者に合わせた進め方をすると、初心者がついてこれず、初心者に合わずと経験者の満足につながらない。こうした宿命的な問題をクリアするには、初心者グループと経験者グループとを分けるしかない。初心者がそれなりに上達したと判断された時点で、経験者グループへ加わってもらうというスタイルがもっとも現実的ではないかと考えている。現在のところあまり大きな問題は起こっていないが、今後は、世話人を始め、会員の方々とこの問題について考えていければと思う。

テキストとする古文書は、丹波にはまだまだ豊富にあるが、数があることと、テキストにふさわしい内容が備わっているかは別問題である。まさにわれわれの調査研究にかかっているといえようが、調査成果の市民への還元という点では、いろいろ方法がある中でも、もっとも直接的な方法がこの古文書学習会のスタイルではないかと考えている。今後も、連携事業における成果と古文書倶楽部の活動とを密接に関連させて取り組んでいきたい。

(文責・木村修二)

連携協定を結んだ加西市との連携事業

加西市と神戸大学との連携協定は、2009年5月16日に締結された。これにもとづき、本年度はつぎのような事業をおこなった。

(1) 青野原俘虜収容所関連資料の調査研究

第1次世界大戦中の独・墺捕虜が撮影したと思われる写真資料の調査研究は、これまで小野市好古館との事業の中ですすめられてきた。本年度からは、加西市立図書館郷土資料係との共同作業が始まり、11/16・12/10・12/28・1/28に写真候補地の現地比定や聞き取り調査(富合地区郵便局等)をおこなった(神戸大から大津留厚・坂江渉、加西市から萩原康仁氏のほか市内在住の織井氏も参加)。これらの作業により、従来不明だった写真の比定作業がかなり進捗した。その成果は、加西市立図書館内の資料展示会「欧州人がフィルムに収めた風景」(2/1～2/20)として発表された。また2月9日(土)には、大津留厚教授が「加西に捕虜がいたころ」と題する特別講演をおこなった(50名以上参加)

(2) 加西市野上町の襖下張り文書の整理

加西市教育委員会の森幸三氏より連絡が入り、野上町内の旧寺の襖の下張り文書の剥離・整理作業についての協力要請があった。これを受けて坂江と板垣貴志特命助教が9/24に現地入りして襖の状態等を調査。その後、専門家の尾立和則氏(三木市在住)の協力を得ることが決まり、10/10の実見の後、11/13に同氏の指導のもと、2枚の襖の下張り文書の解体作業が実施された。そして2013年2月以降、地元の野上町文化財保存会の会員も交えて、同資料の剥離・整理作業がすすめられている。



(3) 加西市の文化財、観光行政への審議協力

センター教員の坂江渉が、2012年6月18日付けで「加西市観光推進基本計画策定委員」、10月1日付けで「加西市文化財審議委員」に任じられ、加西市の観光行政と文化財行政の審議に協力した。とくに前者に関連して、2013年3月に、観光資源と地域資源の双方の掘り起こしと活用を基本とする「加西市観光推進基本計画」が策定される予定である。

(文責・坂江渉)

伊丹市立博物館との連携事業

(東北大学災害科学国際研究所・特定プロジェクト研究「東日本大震災の震災資料の所在調査および収集・保存の手法等に関する検討ー宮城県岩沼市をフィールドとしてー」)

東日本大震災の被災地では震災に関する写真や映像などのデジタルデータ収集とそのデジタルアーカイブの構築が国内外において進められている。一方で、避難所日誌・ミニコミ誌・ビラ・チラシ等といった震災資料(原資料)の収集・保存は、自治体レベル・各種図書館で行われている

が、十分な対応が行われているとは言いがたい。

本研究では、阪神・淡路大震災の経験を踏まえ、東日本大震災被災地における民間を含めた震災資料の所在調査・収集・保存の方法論の構築に向けて、宮城県岩沼市を中心に東北大学災害科学国際研究所と共同でパイロット事業を開始した。

本研究は岩沼市に関する震災資料の所在調査・聞き取り調査および岩沼市に対口支援を行った伊丹市からの派遣職員などに対する聞き取り調査、資料収集を含み、阪神・淡路大震災以降の震災資料に関する研究成果を、東日本大震災の被災地の大学・自治体関係者等と共有し、後方支援も含めた震災資料の調査、収集・保存を実践的に研究し、これを通じて災害資料学の方法論を豊富化し、東日本大震災資料の体系的保存に寄与することを目的とした。

具体的には、2012年11月22日～23日の東北大学との共同調査（岩沼市役所において事業に関する意見交換、岩沼市内の被災状況、宮城県図書館による震災資料の収集状況の調査）を実施し、2013年2月19日には、田中洋史氏（長岡市立中央図書館文書資料室）に対して、長岡市内に設置された東日本大震災の避難所資料の収集・保存の取り組みの聞き取りを行った。3月8日、学内において震災資料の収集・保存を行う東北大学附属図書館、岩手大学附属図書館、宮城県図書館、岩手県立図書館等と現状と課題について意見交換会を開催した。

岩沼市における予備調査は開始したが、本研究の実施期間が、当初の2013年3月末より2014年3月末へと延長されたため、岩沼市と伊丹市における本格的な調査および調査結果の整理・分析、総括研究会の実施は2013年4月以降となった。
(文責・水本有香)

尼崎市における連携事業

(1) 宝珠院文書の研究

これまで、京都大学総合博物館所蔵「宝珠院文書」についての研究会をおこなってきたが、その成果をまとめ、来年度刊行の『地域史研究』において公開することとなり、その構成などを決定した。
(文責・村井良介)

(2) 神戸・阪神歴史講座の開催協力

2011年度以来おこなわれている神戸・阪神歴史講座に対して、地域連携センターは、その後援団体の一つとして名を連ねている。本年度は、3/10の第8回講座「八十嶋ー神崎川・猪名川下流域の古代史を学ぶ」（黒田慶一氏）において、坂江がコーディネーター役として協力した。

(文責・坂江渉)

(3) 『新尼崎市史』編纂への協力

『図説尼崎の歴史』と対になる、市民が地域の歴史を調べる手引きとなる『新尼崎市史』の、内容の検討に加わった。本年度は、巻の構成、各巻の構成を大まかに決定した。次年度以降は構成に修正を加えながら、本格的な執筆に入る。

(文責・市澤哲)

たつの市との連携事業

たつの市との間では、旧新宮町の『播磨新宮町史』の編纂事業以来、密接な連携関係を保っている。本年度の活動は、以下の通りであった。

(1) 神戸大学近世地域史研究会

『播磨新宮町史』編さんの継続事業として2006年より活動を開始した神戸大学近世地域史研究会の活動も7年目を迎えた。本年も毎月一回、月例会を開催し(8月除く)、たつの城下町人の風聞記である『観聞記』の翻刻作業を実施した。その成果として、本年度は、『「観聞記」の世界(一)ー播磨からみる江戸時代ー』を刊行した。

一般市民メンバーは徐々に増加しており、北摂(吹田市)・阪神間(尼崎市・芦屋市・神戸市)・播磨(加古川市・たつの市)といった様々な場所から研究会に参加されている。こうした方々はたつの市の八瀬家住宅特別公開(「八瀬家で学ぶ新たつの史」2012/11/24-25)に足を運ばれたり、センターの「まちづくり地域歴史遺産活用講座試行プログラム」の市民モニターとして受講されたり、地域連携協議会へ出席されたりと、歴史遺産に対する意識が高く、また、フットワークも軽い。さらに、地元で古文書を読む会、史料調査会などを主催するなど「地域リーダー」としての活動を展開、「地域リーダー」の研究交流会という様相を呈するようになってきた。

一方で、市民の方々との研究交流を目的とし

て、当初加入していた学生・院生・研究者は、その後卒業・遠方への就職などもあって現在参加が途絶えている。今後、どのように会への参加を呼びかけるかが課題である。（文責・河野未央）

(2) 古文書講座と「八瀬家で学ぶ新たつの史」の開催協力

2011年5月29日の台風2号の被害をうけた指定文化財「八瀬家住宅」の2枚の襖の下張り文書の分析と展示をめぐり、新事業が昨年度から始まっている。

発見された下張り文書等を素材にした定期的な古文書講座が、地域連携センターと近大姫路大学（松下正和・河野未央氏）の協力のもと開かれ、毎回20名近くの市民がこれに参加した（7月、9月、10月、11月、12月の合わせて5回と2/23公開講演会）。

また11/24-25には「八瀬家住宅特別公開」の一環として、「八瀬家で学ぶ新たつの史」というミニ展示会が旧八瀬家内で開かれ、2日間、たいへん多くの見学者があった。この展示会では、古文書講座の受講者が自ら調べた調査成果についても展示され、新聞報道もされた。



古文書講座は来年度以降も定期開催される予定で、再来年度には、研究成果をまとめた冊子等を刊行する計画も立てられている。

（文責・坂江渉）

三田市との連携事業

(1) 九鬼家文書目録の整理事業

昨年度まで続けてきた三田藩家老九鬼家文書群の整理事業は、今年度は一時休止され展開しなかった。次年度以降に再開したい意向を大学・自治体担当者レベルで協議している。

（文責・板垣貴志）

(2) 市史編集室と連携した兵庫県立三田祥雲館高校の「歴史研究入門」への講師派遣

兵庫県立三田祥雲館高校との間では、引き続き三田市立図書館（市史編さん担当）を通して、高校生及び市民向けの講座やワークショップを開催し、大学・自治体・学校の三者連携の可能性を模索してきた。

今年度は、同校で4月から9月まで実施された「歴史研究入門」（選択型の課題学習）に講師を派遣するなどの形で連携を行った。具体的には、6月にセンター教員が「『水』からみた三田の歴史」第2回として青野ダム築造にまつわる地域史を講義、さらに高校生が研究成果を発表する9月の公開プレゼンテーションにもセンター教員、研究員を派遣して講評を述べ、高校生、市民との連携をはかった。

大学・自治体・学校の三者連携としての試みであるが、ひとまず今年度で事業を終了しすることになった。

（文責・河島真）

三木市との連携事業

昨年度より、文化庁の地域伝統文化総合活性化事業に「三木市文化遺産活用・活性化事業～三木市文化遺産再発見によるまちづくり～」が採択された。三木市観光振興課の担当者および三木市観光協会の職員と協議を重ね、事業を展開した。旧玉置家住宅を活動拠点に、玉置家に保存されていた文書群（古文書・書籍）の整理を進めている市民グループの活動を支援した。

（文責・板垣貴志）

篠山市との連携事業

本年度は、篠山市立中央図書館と連携し、以下のような活動をおこなった。2012年12月1日～2日には、まちづくり地域歴史遺産活用講座試行プログラムを開催した。その講座を受けて、篠山市立中央図書館に収蔵されている地域史料の整理サポーター養成講座（2013年2月23日～24日）をおこない、板垣と澤井廣次が講師を務め、受講者は定員を超え16名であった。次年度以降に整理サポーターは本格的に始動することになっている。

本年度の夏期古文書合宿（2012年9月6日～8

日)も篠山市で開催し、9月7日には、篠山市民センターにて、市民と学生との交流討論会(Rural Learning Network:農の学び場)を開催し、坂江渉と板垣が話題提供者として報告した。

また、2011年度より特別研究プロジェクトの一環として中西家文書の整理、撮影作業を今年度も継続的に展開した。次年度からは、研究会を発足し、撮影史料の解説および研究を進めている予定である。(文責・板垣貴志)

明石市との連携事業

(1)旧明石藩家老黒田家資料の調査

①資料調査

a 黒田家旧蔵文書

本年6月に明石市への寄贈手続きの完了した黒田家旧蔵文書における黒田長保「日記」の翻刻作業を本業務の中で進めてきた。8月25日現在で、以下の史料についての解説を終えている。

- 1.「慶応元己丑年日記」(目録番号4-1)
- 2.「慶応三卯年日記」(目録番号4-2)

一方、解題については①「慶応元己丑年日記」、②「慶応三卯年日記」、③「慶応四戊辰年日記」、④「出京心覚しゆつきょうこころおぼえ」、⑤「明治二己年仮日記」について執筆作業が完了している。

なお、10月に古書店「澤田書肆」で黒田半平家文書が木箱1箱分売りに出された。本文書群は、明石市寄贈分とまったく同類のものだが、いつの時点でどういう経緯で黒田家より流出したかは不明。日記などを含む極めて重要な文書群である。急遽明石市と協議のうえ、神戸大学が購入した。今後は、この史料群についても併せて調査する必要がある。

b 松平家旧蔵文書

黒田家同様、本年6月に寄贈手続きのなされた、旧明石藩主家・松平家旧蔵文書および資料についての調査を行った。これまでの作業としては、9月に実施された(後述)展示会に、本史料の展示も併せて実施したいという明石市側の要請に基づき、展示を前提とする緊急の概要調査および撮影作業を実施した。本文書・資料群には、松平家に「家宝」として伝えられてきた系図類や「年譜」と題する史料が含まれていたが、嘉永7年2月～4月の三ヶ月分の江戸藩邸日記が含まれてい

ることが判明し、これらの文献史料に加え、同家の挟箱や陣羽織といった衣服・箆笥・陶磁器などが含まれていた。

②調査研究

「明石藩の世界」展の実施



2012年9月8日から23日にかけての16日間、明石市立文化博物館において、「明石藩の世界」と題する展示会を開催した。展示会は、黒田家、松平家ともに調査継続中ということもあり、速報展としての意義を持たせたものとしてプロデュースされた。主催は、明石市および明石市立文化博物館、神戸大学大学院人文学研究科地域連携センターの三者となったが、三者による緊密な協議のもとにそれぞれ担当を細かく決定し、神大は、展示品となる黒田家旧蔵および松平家旧蔵の文献資料の選定、および同資料の解説の執筆やキャプション案文の執筆を行い、また展示資料全般にわたっては、開催期間中に配布した解説文の用意(プリントなど)、展示解説パネルの文面およびレイアウトの製作、ディスプレイ作業(撤収含む)、展示会場でのフロア解説(希望者のみ)、およびもろもろのレファレンス、受付(一部)なども担当した。また、モノ資料についても、一部の選定および、全品にわたる解説文の執筆をおこ

なった。

9月15日(日)には、関連企画として記念講演会を行った。冒頭挨拶は奥村弘がおこなった。講演は、前田結城が「黒田家文書「日記」からみえる幕末の明石藩」と題して行った。本講演は、本事業での中間的な成果発表を兼ねた。なお、講演会終了後、講演会参加者を対象とするギャラリートークを実施し、木村修二が担当した。

③書画軸の修復

黒田家旧蔵資料のうち、劣化の激しかった下記の絵画について、修復業者に発注し、修復を実施した。

1. 林半水画「大黒図」(画 14-1)
2. 長谷川雪旦画「桜田門行列図」(画 25)

(文責・木村修二)

(2)地域文化財普及・活用事業へのオブザーバー参加

明石市教育委員会文化財係では、2011年度から、上記の黒田家資料の調査と並行しつつ、明石市内の身近な歴史遺産を調査して、その成果にもとづく「歴史マップ」を作成し、それによる地域活性化をめざす「地域文化財普及・活用事業」が開始された。小野市立好古館の前館長の太田敬通氏(明石市在住)を委員長とする実行委員会が立ち上がり、地域連携センターは、オブザーバー団体として協力をおこなっている。

7/23月と25水には、坂江と古市晃が明石市藤江地区での聞き取り調査に参加し、地域歴史遺産の掘り起こし作業に協力した。またこの両日には、博物館実習生のほか、地域歴史遺産保全活用基礎論Aの受講生もボランティアで参加し、市民の方々とのやりとりについて実修した。

(文責・坂江渉)

高砂市への協力

坂江渉が2011年5月1日付で「高砂市文化財審議委員会委員」に任命され、今年度も市の文化財行政および文化財指定等について審議した。

(文責・坂江渉)

南あわじ市での連携事業

兵庫県教育委員会文化財室の紹介をうけ、2011年6月20日、南あわじ市社会教育委員長の木田

薫氏と南あわじ市活性化委員会の関口功氏、発達科学部の伊藤真之教授がセンターを訪れ、南あわじ市の沼島・榎列・阿万地区での、歴史文化を活かしたまちづくり事業への協力要請があった。昨年度はそれ以来、2012年3月に至るまでさまざまな連携事業がすすんだ。

本年度は、南海・東南海大地震による甚大な津波被害が予測されている南あわじ市阿万地区での歴史資料の調査・活用事業を、南あわじ市教育委員会等に申し入れたものの、さまざまな事情にその実現化には至らなかった。(文責・坂江渉)

淡路市との連携事業

2010年度から坂江と板垣が、特別研究事業の一環として、県内各地の教育委員会等を訪れ、それぞれの管内の民間所在歴史資料の把握状況の調査をおこなっていた。その一つとして2012年6月22日、淡路市教育委員会を訪れた時、市教委が所蔵する古文書等の歴史資料の保管のあり方や燻蒸に関する問い合わせがあった。その所蔵場所である淡路市立青少年センター(所長は資料保管と移管に尽力された海部伸雄氏)を訪れ、資料状況を調査。その後、再度の実見調査を7月13日におこない(坂江・添田・板垣)、虫損の激しい資料群の燻蒸を決定。10/23火と11/6火の2回に亘って、センター所蔵の燻蒸セットで資料燻蒸を実施。11/27火に燻蒸セットを撤収した。



淡路市教育委員会では今回の大学との連携を機にして、来年度以降の歴史資料保全に関する予算化を決定。来年度以降も連携事業をおこなう予定となった。なお今回の連携活動にもとづき、2/2におこなわれた地域連携協議会では、海部伸雄所

長が、淡路市における歴史文化活用事業に関する報告をおこなった。(文責・坂江渉)

猪名川町との連携事業

猪名川町との間では、2009年度に、猪名川町生涯学習センター主催の市民向け講座「リバグレス猪名川」の開催協力をおこなってきた。2011年度に入り、ふたたび3年間かけて協力することになり、昨年度は古代史を中心とする講座を、そして本年度は中世史を中心とする講座を企画した。来年度は近世・近代篇のコース内容が決定している。(文責・坂江渉)

福崎町との連携事業

(1) 『播磨国風土記』および井上通泰の研究

福崎町立歴史民俗資料館開館30周年の記念企画として、『播磨国風土記』の研究に取り組んだ。また、その延長上で福崎の地名の変遷の研究を行った。これに加えて、柳田國男の兄で『播磨国風土記新考』を著した井上通泰について、その業績や人物像の研究に取り組んだ。『播磨国風土記』については松下正和が、地名研究については

山崎善弘・河野未央が、井上通泰研究については井上舞が主に研究を担当した。

これらの成果は、同資料館および隣接する柳田國男・松岡家記念館の特別展(会期:10月20日～11月25日)と、同展の図録において還元した。

また、11月17日に開催された連続講座では、松下正和が「播磨国風土記～井上通泰の風土記研究」題する講演を行い、翌18日には井上舞が「井上通泰の業績と人となり」と題する講演を行った。

(2) 古文書講座の開催

昨年度好評であった古文書講座を、今年度も開講した。講師は河野未央が担当した。実施日は以下のとおりである。

第1回 9月5日

第2回 9月12日

第3回 9月19日

※場所はいずれも神崎郡歴史民俗資料館

講座は概ね好評であり、次年度以降も継続して行っていく予定である。

(3) 三木家未整理史料の整理と研究

共同研究開始時期より継続して行っている、三木家未整理資料の仮目録作成を引き続き行った。

また、三木家研究の一環として、1月19・20日に、兵庫県立歴史博物館で調査を行った。仮目録の作成は、山崎善弘が担当した。今年度を以て、仮目録の作成は終了し、次年度以降、この目録をもとに内容調査を進めていく予定である。

(4) その他

8月29～30日、神崎郡歴史民俗資料館において、例年実施している共同調査合宿を実施した。これには山崎善弘・井上舞・板垣貴志・河野未央・坂江渉のほか、学外から井上勝博・高橋明裕が参加した。

同資料館での資料調査の他、『播磨国風土記』の遺称地とされる地域において、聞き取り調査・フィールドワークを行った。これらの調査成果のうち、古代史の研究成果については、平成24年度共同研究活動報告書にまとめた。

また、福崎町広報紙『広報ふくさき』にて、研究成果を随時還元した。(平成24年4・5・6・8・9・11・12月号、平成25年2・3月号)

(文責・井上舞)

歴史民俗資料館30周年記念
平成二十四年度特別展
播磨国風土記
いにしへの福崎地名探訪

主催 福崎町教育委員会
協力 福崎町立図書館 福崎町立歴史民俗資料館 福崎町立図書館 福崎町立歴史民俗資料館 福崎町立図書館 福崎町立歴史民俗資料館

林前郡 高里里 又此里 川邊里

の詩里 庄山里

平成24年10月20日(土)
～11月25日(日)

●開館時間/9:00～16:30
●休館日/月曜日、祝日の翌日
●入館料/無料

福崎町立神崎郡歴史民俗資料館
〒679-2204 兵庫県神崎郡福崎町西田原1038-12 TEL・FAX (0790)22-5659 http://www.rekimin.town.fukusaki.hyogo.jp/

佐用町との連携事業

佐用町（教育委員会文化財担当者・藤木透氏）との間では、2010年度から本格的な連携事業が始まった。今年度は、「佐用町文化遺産再発見活性化事業」（文化庁・文化遺産を活かした観光振興・地域活性化事業）の最終年にあたり、つぎのような活動をおこなった。

(1) 歴史資料の取扱い学習会

2012年9月10日～11日の2日間、佐用町役場第2庁舎の会議室で、佐用郡地域史研究会メンバーのほか募集した市民に対して、町内で見つかった襖の下張り文書の取り扱い、襖資料の解体とその整理作業を実施した（坂江のほか、近大姫路大の松下正和・河野未央氏が指導協力）。

(2) 事業のまとめ発表会と啓発冊子の発行

2013年2月9日、佐用町役場第2庁舎の会議室で「まちの文化遺産を考える」と題した事業成果発表会をおこなった（坂江のほか、松下・河野両氏、事業に参加した市民による報告）。また3年間の事業成果を、市民向けの啓発冊子『わたしたちの文化遺産 -資料保存ガイド-』として刊行することが決まり、現在、編纂作業がすすめられている。これは佐用町の全町民に配布予定である。（文責・坂江渉）

『香寺町史』の編纂と活用事業

昨年度の町史完成を受けて、これからはこれをどう読んでいくかが課題である。そこで、第4次となる「町史を読む会」を昨年度から今年度にかけて8回計画し、今年度は第3回から始めて6回開催した。受講者は平均十数人であった。

第3回は5月15日、村井講師（中世2）が「武士の動向」のテーマで中世史像はどう変わったかを話す。第4回は6月10日、森元講師（近世1）が「近世村と山野の争論」をテーマに今後に残された課題をとりあげる。第5回は7月6日、大国講師（近世2）が「近世の支配」のテーマで近世の支配形態について講義。第6回は9月18日、前田講師（近現代1）が「幕末維新と香寺」のテーマで町域で何が起こったかを話す。第7回は10月16日、吉原講師（近現代2）が「日露戦争と地域社会」のテーマで史料を交えて解説

する。第8回は11月13日、大槻（近現代3）が「同時代史を読む」のテーマで町史の背後にある戦後史の流れをたどる。

次いで、地域住民の手で町史を引き継ぐのが大字誌の編纂である。大字誌は現在、岩部・土師・田野の3集落（自治会）で進行している。編纂を支援するために、一昨年度に続く2回目のフォーラム「大字誌をつくる」を2月13日、共催で実施した。丹波市棚原地区から「地域への愛着と歴史文化を活かしたまちづくり」と題した時宜を得た基調講演を受け、続いて土師・岩部からは現在までの編纂経過や課題について実践報告があった。内容が具体化し、課題が明らかになってきており、今後編纂へとさらに広がることを期待したい。なお、このことに関連して、第10回歴史文化をめぐる地域連携協議会で大槻が『大字誌づくりを目指して』と題して報告している。



歴史研究会の町内巡検も地域の歴史遺産を再認識する活動である。毎年地区を変えて実施しており、今年度は10月27日、岩部・北広瀬地区であった。渡し場跡や蛇穴神社など地区内の史跡・文化財を地元の会員の案内で実地見学しており、今年は小中学校から管理職2人の参加があった。参加者は32人。地域の歴史遺産を伝えていくうえで小中学校との連携が今後の課題であろう。

また、ムラの史料を読む作業も続いており、八葉寺文書の解読を古文書クラブが行ったり、古文書入門講座で円覚寺文書や岩田二郎家文書を読んだりしている。今年は町史研究室で編集した『八葉寺文書目録』を八葉寺から発行、また、八葉寺文書を含む整理済み資料目録を『香寺町史編集資料目録集 8』として姫路市から刊行された。

町史史料の保存については、5月に教育長が保

管場所の実態を視察と聞いたものの、その後も市から具体的な提案はなく、市史編集室と協議を続けているが進展を見ていない。

なお、香寺町史研究室は、神戸大学と犬飼自治会との契約にもとづき開設当初から公民館別室を借用して活動しており、来年度以降も更新手続きが必要である。（文責・大槻守）

第3章 被災資料と歴史資料の保全・活用事業

歴史資料ネットワークへの協力・支援

(1) 災害対応関連

7月22日（日）～23（月）の両日、栃木県芳賀郡茂木町 S 家の被災歴史資料レスキューに参加した。S家は、元禄期から続く近江商人の家で、茂木で酒造株を買い取り、以来農産物の売買や質屋で財をなし、現在も酒造を営む旧家である。1986年8月5日の茂木水害（那珂川の増水）で被災し、今回、東日本大震災でも被害を受けた。敷地内に現存する2棟の土蔵には、自家の酒造・金融経営の帳簿に始まり、地元の歴史にかかわる古文書類、屏風・掛け軸などの美術品、そして膳碗類が多数収められていた。代々の当主が芸事にも造詣が深かったことから、栃木県の文化財指定を受けた美術品も含まれる。

参加人数は、2日間でのべ80名前後。メンバーは、一般の方はもちろん、茨城史料ネットと栃木史料ネット、栃木県立文書館、栃木県立図書館といった文化財関係者にとどまらず、神奈川資料ネット、千葉史料ネット、宮城資料ネット、歴史資料ネットワーク、NPO 歴史資料継承機構、文化庁と幅が広がった。また、近江商人であった S 家の史料を用いて執筆された、滋賀県内の自治体史関係者も参加していた。

土蔵、質蔵のそれぞれで、棚やまとまりごとに番号札を貼り付け、歴史資料の保管状況を「現状記録用紙」にスケッチし、写真撮影してから随時取り出していた。墨書があるものについては、すべて取り出した。番号がついた歴史資料は整理作業場に送られ、クリーニング、「概要記録用紙」への記入、ダンボール・エアキャップで梱包されたのちに、搬送待機史料置き場に集められ、一時保管場所にピス

トン輸送で運ばれた。これと並行して、建物の記録が作成され、文化的価値の調査が行われた。レスキューした歴史資料については、9月以降、茨城史料ネットに参加する若い大学院生が中心となり、茂木町教育委員会を支援して、定期的に整理を行っている。またこのレスキューをきっかけに「栃木文化財・歴史資料救済・保全ネットワーク」（栃木史料ネット）が発足した。

つぎに11月1日～3日の3日間、長野県北部地震の被災地・長野県栄村で被災史料の保全活動を行う「地域史料保全有志の会」の活動に参加した。きっかけは、7月8日に行われた歴史資料ネットワーク総会シンポジウム「歴史遺産と資料を守りぬくー関西と知られざる大震災の現場を結ぶー」での白水智報告「これまでがあつて、これからがあるー栄村での文化財保全活動についてー」に触れたことである。

主に、被災した民具が収められている旧志久見小学校（廃校）で、古文書班と民具班に分かれて被災史料の整理を行った。私が参加した古文書班では、整理点数を増やしていくことよりもむしろ、基本的な文字の読解や内容の紹介・説明に重点がおかれ、初心者の方でも気軽に参加できる雰囲気があった。会場には、地元の文化財担当者だけではなく、レスキューに参加した一般の住民も入れかわり立ちかわり出入りする。彼らは地元の食材と一緒に、自宅に保管されていた民具を持ち寄り、参加者に披露する。すると、古文書や民具を整理している者も手を止め、初めて見る民具を囲んで、地元の生活や歴史の話題に花を咲かせる、といった具合である。それは単なる被災史料を整理する場ではなく、様々な時代や角度から栄村を楽しみ、地域の魅力について学び、考えることができる場であった。新しい被災史料の保全・活用の可能性を感じることができた。

（文責・添田仁）

(2) 神戸市兵庫区平野地区における活動

平野地区での活動の中心は、「奥平野古文書勉強会」への参加である。2010年2月に第1回目を行って以来、ほぼ1ヶ月に1回のペースで開催されてきており、本年度も同様のペースで開催されてきた。すべての例会で木村がチューターを行っている。参加者の実力は確実に上がってきており、テキストの進み具合も相当早くなっている。会員は、新入会者が1名あり13名となった。本会は次年度以降も継続することになっている。

（文責・木村修二）